

昭和の南海地震体験談

氏名:三井田 隆(みいだ たかし)
生年月日:昭和8年9月25日
地震を体験した場所:日高町・自宅寝室
当時の家族状況:父、母、祖父、祖母、弟、妹

本人の希望により写真は
掲載しておりません

1) 地震発生時の状況

当時中学2年生であった。自宅寝室で就寝中に激しい縦揺れを感じ、目が覚めた。すぐに飛び起き、揺れもかまわずに自宅前の浜に弟と2人で出て行った。倉庫の瓦が落ちてこないか気にしながら路地を通り、浜に出ると、海が真っ赤になっていた。そのまま動かず、揺れが収まるのを待った。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まってから自宅に戻り、家族と話をしていた。まだ夜が明けず、暗い時間帯で停電していたらしく、ろうソクを使用した。暫くすると、浜から「津波やー！」という声が聞こえたので、弟、妹と私の3人は自宅より15m程度離れた高台のお宅の庭に先に避難した。底引き網の乗組員の人達が陸に向かって叫んで知らせてくれたようだった。避難場所の庭で、両親と祖父母を待っているうちに潮が来たのが判った。当時、燃料用のドラム缶が海沿いに大量に置かれていたのだが、津波により崩され、ゴロゴロと大きな音をたてて、潮と一緒に流れた。家族が来ないので心配していたところ、ドラム缶が自宅の戸を突き破り、中に流れ込んだので、弟と妹をその場に残し、1人自宅に戻った。中に入ると、いくつものドラム缶があり、家族の避難の妨げになっていた。目が不自由だった祖母を起こし、父が背負っているうちに潮が入ってきたようだ。水の中をドラム缶や障害物を避けながら、必死で避難し、無事にたどり着けた。胸まで浸かっていた。潮が来た時だったので歩けたが、引き潮の時であれば流されていただろう。後に津波が収まった周囲の状態や岩場を流れる潮の強さを見たが、やはり引き潮の方が強いようだった。川と同様、流れる速さで胸まで浸かると歩けなくなり、流されてしまうだろう。暗かったのではっきり目撃した訳ではないが、第1波が一番大きく徐々に小さくなっていった。地震＝津波という連想は大人から聞いていて知ってはいたが、「まさか」という気持ちだった。

3) 家族の行動・被害

家族は全員無事だった。昼頃自宅に戻ったが、襖や雨戸が流失しており、床上90cm程度の所まで濡れた跡が付いていた。流れ込んで来たドラム缶は5個あった。浸かった壁の土は復興してから徐々に剥がれていき、ほとんど使えなくなり、後に建て替えた時、壁板を貼っていたところでも、はずしてみると中は骨組みだけになっていた。地震による被害はなかった。

4) 集落・周囲の被害

1歳の男児と男性1名が避難中に引き潮に流され亡くなった。青年団や地域の人達が男児の捜索をしている中、流失した雨戸を探していて、男児を偶然発見した。近くの旅館で毛布を借り、抱いて捜索船に乗せてあげた。一定の流れがあったようで、雨戸も同じ場所で見つけた。父親に抱かれ避難したが、海に引き込まれ、手を離してしまい、分からなくなってしまった。父親は沖に出ていた底引き網船の乗組員の方に助けてもらった。もう1人の男性は、当時、会社の副社長をされていて、会社の網を県道に繋げてあったのを見に行き行って引き込まれたようだ。男児とは違う所に流れついていた。地域の3分の2の家屋が床上浸水した。土地が一番低い家屋にはドラム缶15個が庭一杯に流れ込んでいた。地震による被害は無かった。

5) 地震・津波後の生活

自宅で片付けながら生活をした。潮に浸かった物は全て水洗いしたが、畳は完全に洗えず、一部は新しいものに替えざるを得なかった。元通りの生活に戻るまで半年以上かかった。飲み水は以前から地区に飲み水を溜める場所があったので引き続き利用したり、飲料水として使っていたお宅の井戸水を頂いたりして確保した。自宅にも井戸はあったが、使い水として物を洗ったりするだけに使用し、飲み水には使っていなかった。多少の農作物はあったが、量的に足りなかった為、戦後ということもあり食料難だったので、配給支給に頼っている状態だった。

6) 次の災害への備え

地震＝津波という意識があるのと無いのでは結果が大きく違ってくるので、訓練はとても大事だと思う。咄嗟の判断が付き易く、行動に移し易くなるので、避難訓練には参加するようにしている。非常用袋を作り、水を容器に入れて、常に用意し、備えている。自宅を建て替えた時、地盤面を1.1m上げた。近々、家具を固定しようと思っている。地区で避難場所が決まっている。

7) その他

後から底引き網の漁師から聞いた話だが、地震時は漁に出かける時間帯で船に乗っていた頃だった。地震後30分も経たないうちにエンジンをかけたが海水が無くなりかけられなかった。津波と判ったようだ。